

吉備中央 小中一貫校運営

希望学園30年 不登校問題に光

不登校の児童生徒を受け入れている吉備中央町高谷の小中一貫校「吉備高原のびのび小」「吉備高原希望中」を運営する学校法人「おかやま希望学園」（徳光泰弘理事長）が、創立30周年を迎えた。「学校に行きたくても行けない子供たち」に、安心できる居場所と義務教育機会を提供しており、この間に在籍した児童生徒は計1090人。設立の理念や意義、使命を再認識して次への新たな出発点にする。

（根本博行）

寮生活通じ豊かな教育 決意新た

のびのび小は1995年、地元
の学校になじめず、欠席しがち
だった子供が、安心して通え、伸
び学べる全寮制の小学校として
開校した。学園によると、当時は
病気や家庭の事情以外で長期欠
席する子供たちは「怠学児」「登
校拒否児」と認識され、不登校の
研究は緒に就いたばかり。具体的
な解決策は、学校に行こうとい
う子供の意欲を高めることだっ
たという。

◇

これまで、すべて順調だったわけではない。

2008年度、県は私学助成の算出方法について「助成額は基準日（5月1日）の児童生徒数などを基本」と変更。児童生徒の多くが2、3学期に転入学する両校は、運営に欠かせない助成金がカットされる可能性があった。12年度からの適用とあって、理事会などは「閉校やむなし」との結論に達した。

「閉校危機」は多くのメディアに取り上げられ、学園には「貴校のような学校が求められている」などの応援メッセージが多数寄せられた。存続を求める署名も1か月足らずで1万3000人分集まった。こうした活動が実を結び、

学園創立30周年記念式典



記念式典であいさつする徳光理事長

県が年度途中の児童生徒の増加に対応できるよう見直したことで、学園は存続を決めたという。

◇

「早寝・早起き・朝ご飯」の生活リズム、異なる学年で教え合い、励まし合う集団づくりに重点を置き、自主性や社会性を養うとともに、自己肯定感を醸成してきた同学園。30周年記念誌「雲海の寺子屋 おかやま希望学園からの発信」には卒業生や保護者のメッセ

13日も掲載されている。
04年度中学卒業生は「希望学園は人生の分岐点。気に入らないことがあると他者に攻撃を加えていたが、寮生活で友人との絆が強くなった。ともに過ごした仲間は今でも大切な友人」、18年度中学卒業生は「高校進学後、一人暮らしをしながら専門学校に2年間休まず通い、3Dデザインの仕事に就いて元気に通勤している」と寄せた。

保護者からは「学園での生活が（息子の）その後の学校生活や社会に出てからの人生に大きく影響している」「先生があのととき叱ってくれたおかげで今の仕事（病院事務）を頑張れていると娘が話してくれる」など。子供2人が通ったという女性には「長女は短大卒業後、音楽関係の会社に入社。息子は短大の保育科に進学した。ゆっくりと見守りたい」と書いた。

生活と学習の一体化による教育で「知・徳・体」の調和が取れた児童生徒の育成を目指してきた30年。9月6日には在校生や教師、保護者ら約120人が出席して記念式典が行われた。

徳光理事長はいさつで「寮生活を通して自立と社会参加、個性豊かな人間育成に取り組んできた。設立の初心に返って、次への一歩を子供たちとともに力強く歩み出していきたい」と決意を新たにしていた。



旧津賀西小を利用して開校した「吉備高原のびのび小学校」保護者らの声を受け、日本財団の協力も得て開校した吉備高原希望中学校（いずれも吉備中央町で）

